

開会 平成30年2月9日
閉会 平成30年2月9日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

平成29年度第2回足利市総合教育会議会議録

1 開催日時 平成30年2月9日(金)
開会 午後1時30分 閉会 午後3時00分

2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

3 出席者

市長	和泉	聡
教育長	若井	祐平
教育委員	笠原	健一
教育委員	櫻井	淳子
教育委員	市橋	雅子
教育委員	菊地	義典

4 会議出席した事務局職員

総務部長
政策推進部長
健康福祉部長
生活環境部長
都市建設部長
上下水道部長
教育次長
行政管理課長
教育総務課長
生涯学習課長
学校教育課長
教育総務課庶務担当総括主幹
生涯学習課生涯学習推進担当主幹
学校教育課指導担当指導主事(主幹級)
教育総務課庶務担当副主幹

5 傍聴者 なし

6 会議日程

日程第1 議題(1)

足利市の教育目標について

日程第2 議題(2)

小中学生の学力向上について

7 議事の経過

○ 開会

○ 和泉市長あいさつ(要旨)

平成27年度から、新しい制度の下で総合教育会議が始まったが、今回で6回目になる。これまで皆さんと共に、時に現場の先生に来ていただいて、足利市の教育現場が持つ課題や情報の認識の共有を図ってきた。

今日は、行政各部門の部長をオブザーバーとして参加をさせている。先日見直した、「足利市の教育目標」を、行政としてもあらためて再認識をしたいと考えている。

教育委員会では、本年度から「かなふり松プロジェクト」が始まっており、リーフレットの作成、活用、学校の指導主事による学校訪問、先進地の視察等を行っている。また、教育委員の皆様は、先日、学力向上の取組の視察先として、福井県を訪問されたと伺っている。その時の感想などもお聞きしたいと思っている。いずれにしても、未来を担う足利市の小中学生の学力向上のためにどのような取り組みが考えられるか、皆さん方から積極的なご意見をいただきたい。

○ 若井教育長あいさつ(要旨)

総合教育会議は、本年度2回目になる。今回も、意見交換を幅広く行い、課題を共有し合って今後も一層連携協力を図れるようお願いしたい。

2月2日、足利高校を訪問させていただいた。行った目的は、生徒たちが研究をした中身を発表するというところで、体育館で発表があった。文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールという指定を足利高校は24年ごろから受けて、毎年発表会をやっている。狙いは、子どもたちの科学的な思考力を育むことだ。生徒たちが、日常の自分の身の回りにあるところから課題を見つけて、その課題を予想し、どうやったら答えが出るかという実験方法を考え、繰り返

し繰り返し実験をして4、5人のグループで協議して結論を出すということだった。会場では、東北大学、宇都宮大学、群馬大学、足利工業大学の教授の方々がその発表を聞いて、生徒に質問をしたり、やり取りをした。その質問に対して、実に、足利高校の生徒は堂々と一つも臆することなく、自信をもって教授の質問に答えている。その姿を見て、私は本当に、これは素晴らしいなと思った。まさに、いま日本の教育で求めている自ら課題を見つけて、自分たちで考えて判断し、そして、問題をよりよく解決していくという、その力が育っているということを目の当たりに見せてもらって、大変うれしく思った。

また、2月4日、渡良瀬川の河川敷で凧揚げフェスティバルがあった。育成会ごとに、子供と大人が一緒になって大凧を作る。畳4畳ぐらいあるか、大きな凧だった。連凧もあり、小さな凧を100以上つなげて揚げた。フェスティバルを見て感じたことは、子どもたちが、学校で、学ぶという以外に、こういう地域での体験というのが、ものすごく大事だと感じた。どうしても、教科書で学んでいるものというのは、時間がたつと剥げ落ちてしまう。ところが、自分が苦勞して、仲間と協力して、地域の方から教わりながらやっていくという、これは本当に忘れられない本物の力になっていくと、そんなふうに思った。凧が揚がった時の子どもたちの歓声と一緒に喜ばせてもらった。足利の子どもたちが、本当にすくすくとたくましく成長しているその姿を見せていただき、うれしく思ったので、紹介させていただいた。

○ 日程第1 議題(1)

市長

それでは、(1)「足利市の教育目標について」を議題としたい。

先日、「足利市の教育目標(見直し版Ⅱ)」が出来上がった。あらためて、教育長から「足利市の教育目標」の意義について説明をお願いしたい。

教育長

自分が今まで先輩から教わってきたこと、あるいは自分自身が教育目標とはこういうものだなど、自分の考えも入っているが、お話をさせていただきたい。

当時、昭和56年、もう40年ぐらい前、どんな背景があって、この目標を先輩たちが創られたのか。そして、当時の人たちの願い。最後にまとめて教育目標の意義ということでお話をさせていただきたい。

当時の先輩は、私の想像だが、おそらく足利学校のあるまち足利にふさわしい教育目標というものを考えられていたのではないかと思う。この教育目標にも、随所に足利学校のことが出てくる。足利学校というと、建学の精神の自学自習という、その自ら学ぶというところが、市民の皆さんが自ら学ぶ人になっ

てほしいという、そんな願いが込められていたのが一つあったのかなと思う。もう一つは、その当時は中曽根内閣の時に、臨時教育審議会というものが、内閣直属の組織として作られて、当時、これからの日本の教育はどのような方向であったらいいかというのを臨教審で話し合われて、答申が出された。その中に、「生涯学習への移行」ということが謳われていた。いわゆる、いつでもどこで誰でもが学べる社会、それがこれからの日本の教育にとっては大切であるということで、今でもずっと今日の教育はそれが続いているし、これからも続いていくだろうと思う。生涯学習ということ考えたときに、学校教育では、子どもたち自ら学ぶ、自ら課題を見つけ、自ら学んで、そして自分の力で問題を解決していく、そういう力を小中学校の義務教育段階で身につける。そして、そこで育ったものが、一生涯にわたって学び続ける、大人になっても学び続けるという基礎を育てていく。それが学校教育であろうかと、背景としてとらえた。そういうことから考えると、その当時の先輩たちの願いというのは、市民が、生きがいというか目的をもって生き生きと毎日を暮らしてほしい、そういう足利市民になってほしいというのが、この目標に込められているのかなと思う。

そしてもう一つ、我々行政側に立った時に、行政がいろいろな施策を打つ、その施策のよりどころというか、目的をしっかりと持って施策を展開して行くのだという、そういうことがあったのかなと思う。そんなことから、私は、今回見直しをした「足利市の教育目標」の意義は大きく二つあると考える。

一つは、市民にとってこれから自分が毎日、日々目的を持って暮らす、その際に自分が目的、目標を立てる際にこの目標を参考にして、私の目標、我が家の目標、職場の目標、そういう目標を立てる際の一つの参考として、「教育目標」というものがあるのかなと考える。

もう一つは、我々行政の方で、いろいろな施策を立てる際のよりどころとして、この目標を活かしていくのだという、そういうところに意義があるのではないかというふうに考えている。

市長

教育委員の皆さんから今回の見直しに絡む感想、ご意見、あるいは情報提供等、大きな久しぶりの改正ということで、時代の変化もあったと思うが、個人的な思いとかでも結構なので、伺えればと思う。

委員

今回の見直しは、前回は平成10年に、一度見直しを行って、二回目の見直しになると思うが、見直しにあたって社会が大きく変わってきている。特に情報通信機器の発達が社会に影響するところが大きい。やはりこれを入れていかないと、今に合ったものにならないだろう。特に、スマホとか、タブレット、

パソコンという部分について、見直しは必要だったと強く感じた。

それと、今回、タイプの見直し、達成目標のタイプA、B、C、D、Nとかあったと思うが、その見直しをしたということだ。その見直しをするために、市民約6,600人対象のアンケート調査を実施したということも、実態を踏まえているという意味で重要なことだと思った。

今回、見直し版Ⅱができるわけだが、教育目標について行政として再認識をというお話がご挨拶の中にもあったが、再認識をして、さらに普及啓発をし、広げて行く、かなり忘れられている部分もあると思うので、そこをあらためて見直ししていただければと思う。広報、リーフレットも作成するようだが、その投げかけというか、見直しにあたっての新井郁夫先生のご指導を見せていただくと、全国に注目してもらえるような部分を作れば、逆に足利市民が関心を持つという面もあるのではないかというのもあった。せっかくこれだけ大掛かりに見直しをしたので、やはり、広めて浸透していくようにすることが大事なことだと思った。

新井郁夫先生のご指導の話をしたが、「足利市の教育目標」の「教育」という言葉をどこかで「学習」と、「学習目標」にした方がいいのかと考える。教育というと何か、教え育てるといのようなイメージを文字の上から持つが、生涯学習ということになると、特に足利学校の自学自習というか、自ら学ぶというところをさっきも教育長がおっしゃっていたが、そういうことを考えると、今後「教育目標」という言葉も見直しが必要かなと思う。

市長

「教育目標」というと、上から目線な感じがする。

委員

「教育目標」というと、子どもたちならよいが、市民に教育というのは、どうとらえるのかなと思う。自ら、みんなやっているわけなので、60、70、80の人が教育という感じではないのかなと思う。意識が変わってきているのだと思うが、どこかできっちりと検討を加えた方がいいと思う。さっき、教育長さんが、意義を二つおっしゃっていた。行政の施策のよりどころとするというのはもちろんのこと、市民にとってというところを考えたとき、市民は「教育目標」と言ったら、固く感じるかと思う。今の人たちにしてはどうかかなという部分があるかと思う。すぐということではなくて、先輩たちが創ってきたものなので、よく検討を加える部分も必要かなと思った。

委員

当初、委員会の中で見直しの問題が出始めたころ、15年も経つと時代背景、社会背景により、いろいろと環境が変わってきた。そういう中で、もちろんこれまでの最初の方向設定、それから見直しも、その時はベストだったろうけれども、やはり15年年月が流れる中で、少し時代に合わなくなってきた、環境に合わなくなっているのが見えてきている。それは何かなというのを拾い始めた。

もちろん、実務的な作業は、アンケートも含めていろいろ広く、多くの方にやっていただくことに後でなったが、当初やるかやらないかという話があった。その時に時代背景が違うことと、一つには平成23年3月に東北の震災があった。その時に多くの方が亡くなったり、住むところがなくなったりした。その事実は、本当に悲しいことだったが、一面、絆という言葉ができて、助け合うこと、支え合うこと、やっぱり人間はそれができるのだと実感した。命の大切さをまざまざと見せつけられたし、知らされたし、その反面、人間というのはつながること、支え合うこと、素晴らしいことができるのだなというのを当時知った。

こういうことを新しい見直しの中に織り込みたいと、それがまた、話が広がるかもしれないが、いじめだとか、お年寄りに対する思いやりだとか、自殺だとか、そういうことの問題が縮小したり、いい面が延ばされたりすることがあるのではないかと感じた。

命のことと絆のことが、一つ出た。それから、グローバル社会という中で、いろいろな形で世界が密接につながっている。海外へも、人も企業も進出していく、海外から、人も企業も来る。そういう意味では、国際化の波が、15年経っている中では違いうだろう、それもどういう形かで織り込む必要があるのではないか。四つある中で、それが二つ目である。

もう一つは、女性が非常に活躍する社会になっている。女性も社会進出している中で女性の活躍ぶりも、今後も期待することをどういうふうに織り込んだらいいのか。それも、15年前、30年前と違っていると思う。それが三つ目。

もう一つは、今、委員も言っていたが、ICT化、情報化の中で、当然昔はスマホもなかったし、パソコンもなかったが、それが有効利用されているのかも見直しが始まった。平成23年、24年頃には、携帯とかゲームとか、情報機器の扱いにおいて、少し問題すら見えてつあった。有効に活用すれば、すばらしい文明の利器だが、使い方を間違えると生活が乱れ、いろいろなことで弊害が起きてくる。あるいは、事件や事故に巻き込まれる可能性がある。そういう意味では、ICT化、情報化の中で、正しい活用をどうするか。そういう四つぐらいは、必ず織り込ませなければならない。

だからやはり、見直しも必要だろう。ならば、については簡単な見直しではなく、腰を据えてじっくりとやった方がいいのではないかというのが、当時の話だった。残念ながら、手順が少し簡略化されて、もしかすると、失礼ながら予算が付けづらいとか、人の配置がしづらいとか、そういった実務面での裏付けが弱かったかとは思う。我々委員の考え方に対してのとらえ方というか実行面が弱かった。それをずっと言っている中で、年度で言うと

27年度の終わり頃か、中ほどだったか、本格的にやろうということで、こういう形で出来上がった。

私にとっては、6年、7年かかっていたの集大成だし、これは素晴らしいものができたと思っている。多岐にわたって、アンケートも含めて見直して、今の時代にベストなものが出来上がったのではないかと思う。その労力たるや、大変なことは推察できるが、見事にそれをやってのけてもらえた。これから、15年間は、見直しをせずにこれでやっていけるのではないかなと思う。むしろこれを基軸にして、市民の方の意識や行政の方向性とかまさしくこれをベースにやっていくと、足利の教育行政、しっかりやっていけるのではないかと思うし、私どもも、一部、このことと関わられたということは、誇りに思う。

市長

あらためて、見直しの中身は大体見させてもらったが、今、震災を受けての命と絆の大切さが一つで、二つ目は国際化、三つ目が女性活躍とか女性の社会進出、四つ目が、スマホとかパソコンに代表される情報化に対してどういうふうに向き合うかみたいなそういうことだと思う。

例えば、情報化の話だと、教育目標番号10番で、「情報機器の正しい使い方」を指導することができる」という項目が入ったり、あと、二重線になっているところが、「スマートフォンやゲーム機をはじめとする情報機器の適切な使用など、子どもに対する情報モラルに関する指導の徹底」などが入ってきて、この辺が反映されてきた部分になる。震災を受けてのことを意識して手直しをした部分は、具体的にあるか。

事務局

例えば8番の「災害時に自分の命は自分で守り、助け合うことができる」等、災害時の対応をそれぞれの年代で入れた。

市長

女性の社会進出は、どこか反映されているのか。

委員

もちろんそれは、23年とか24年頃に委員会の中で、未来背景としてそういうところが大きく違っているなというベースの認識のところなので、一つひとつどこかに織り込んでいるということではない。ただ、根本の考え方はある。

事務局

教育目標28番の具体策の下に、LGBTとかヘイトスピーチとかが問題になり、人権問題として取り上げている。

市長

聞きながら思ったが、今、ビットコインの話などある。なんであんなことが起きたのだろうと思う。ああいう経済活動に対して、きちんと情報を得て、きちんと学んで、そういうことに向き合うとか、そんなのもこれから必要になってくるのかなと思う。単に、儲かるからいいみたいな話で、消費者教育みたいなことにもなってくるのかなと思う。

委員

見直しについて、アンケートを取ったり、一つひとつされてきた作業を見せていただいたので、本当に大変だったと思っている。同時に、一冊の本に創りあげたときの方の努力もすごいものがあるなと驚いた。

私は、足利に住んで25年だが、教育委員になるまで、この「教育目標」があるというのを、恥ずかしながら知らなかった。それは、私が足利で生まれたからではないからかなと思って、周りの方に聞いたが、周りの方もご存じない方が多かった。それが一番ショックで、こんなに一所懸命作ったものを、もったいないなという気持ちが一番強かった。それを思うと、今回こうやって見直しをしたことがいいチャンスなので、見直ししましたよということで、本当に広く知っていただきたいなと、それが一番強い思いだ。

「学習目標」という話があったが、例えば、共に育つにして「共育」にしたり、そんなのもありかなと思う。「足利は教育はやめました、共に育つです」みたいにして、こんなことを考えたんだなというようなイメージに使える材料になるかなと思った。

市長

存在そのものを知らない人も結構、まだまだ多いということ踏まえると、こういう見直しといういい機会があるので、いろいろなところで周知していくとか、発信していくかというのが、また一つ大事なテーマかなと思う。

教育長

多くの人に広めるというのは、まさにそれが今の課題でもある。見直しをやったことでこれに関わった方がたくさんいらっしゃる。社会教育委員さんとか生涯学習推進委員さんとか、多くの方々がそれぞれ、団体の長の方も出てきている。見直し作業をする、それを時折報告を受ける、そういう見直しの過程というの、一つ大事にしたいなと思っている。

それともう一点、今日の資料の中の最後に、「足利市の教育目標」と各課の事業数一覧（平成26年度現在）という表がある。第7次具現状況評価の報告書の中の一部のページだが、これを見ると、私はあらためて教育委員会だけではなく、いわゆる関係各課も教育目標具現化のためのいろいろな施策に関わっているということを認識した。右側の一番下の角に535とある。535という数字、教育委員会以外も含めてだが、これだけの事業が教育目標具現のために行われている。我々行政、市役所の職員の皆さんもあらためてこういうところを、自分たちの事業と教育目標が関わっているのだというところを、もう一度見つめなおす必要があるかなと感じる。

市長

せっかく部長が来ているので、後で全員に振るので、心構えをお願いします。

委員

この「教育目標」の見直しの作業に関わったのは、教育委員になってからなので、私としては議論の途中から入った。私も教育委員になるまでは、「足利市の教育目標」は実はよくわかっていなかったところもあった。あらためて最初の見直しの議論に入った時に、いかに先人たちが偉大だったか、よくこれを創ったなというのが、驚きというか、非常に大きな足利の財産だなというのは強く感じた。

また、目標の見直しにあたっては、商工会議所の方からアンケートが振られてきて、当社の社員の方にアンケートに答えてもらったが、残念ながら当社の社員もだれ一人として「足利市の教育目標」を知っている社員がいなかったというのが事実だった。

かなりの人が知らないというのは確かなことだと思うし、いかにこの壮大な「教育目標」があって、それのもとで足利市の教育行政、また、様々な行政が行われているかというのは、みんな理解していないところがあると思う。非常に丁寧な見直しの議論、長い年月をかけてやってきているというところは、実感をするし、非常にいい見直しができたというふうに私も感じている。いかに当事者意識をもって市民に知らせていくかということが大事だと思う。そんな中で、先ほどご指摘があった、「教育目標」で市民一人ひとりに当事者意識み

たいなものが芽生えるのかなというところが感じるところもある。共に育つで「共育」に変えた方がいいのではないかというアイデアも出たが、せっかくここまで見直したのだから、さらに踏み込んで市民の方にきちんと寄るような形に、思い切りしてもいいのではないかなというところも感じている。

そういう中で、自分たちの年齢の中で、いままでどういうふうに学習してきたかというのを見直す、非常にいいものになると思うので、この見直しにかけた労力をしっかり足利市民に還元する、それが非常に大切ではないかなと感じている。

市長

各部長から見て、こんなところが我々の部の仕事と「教育目標」と接点があったのかとか、関連があったのかというのを部長ご自身の感想でもいいし、発見でもいいし、気づきでもいいが、あるいはそれ以外のことでもいいが、一人ずつコメントをいただきたい。教育長から先ほど、「教育目標」をそれぞれの市民や家庭の目標であると同時に行政の施策を立てるときの一つのよりどころというような説明もあった。

上下水道部長

お話を伺っていると、この「教育目標」、より多くの方に知っていただく、これが大切だろうということだった。その視点でお話を伺っていて、一つ感じたこと、取り組みがあるのでお話をさせていただければと思う。さきほど、事業数が535という話があった。表を見ていただくと、上下水道部は、ページのちょうど真ん中あたり、上から三つ目に「健康安全な生活態度を身につけましょう。」ということで、下水道課の一つまるがついている。

下水道については、簡単に申し上げると、水をきれいにしてきれいな川に戻しましょうという取り組みになる。上水、下水ともそうだが、表に出ていない。相田みつをさんの言葉を紹介させていただくと、「土の中の水道管、高いビルの下で下水、大事なものは表に出ない」という言葉があって、「教育目標」と同じで、上水、下水は、ご理解をいただくのがなかなか難しい。

そこで、知っていただくという取り組みの中で、今年7月22日の土曜日に、水処理センター、最終的な下水を処理してきれいにして水を流す、こういう施設だが、これを市民の皆さんに公開をして知っていただく、こんな機会を設けた。昨年度から夏休み中にこれを移そうということで、市内の小学校をご案内申し上げて、今年は600人を超える方にお越しをいただいた。この中心になられたのが、小学校の生徒さん、それからそのご兄弟の方、それからご両親、ご家族がお見えになった。大変多くの方に来ていただいた。

この「教育目標」を創って、大切なものをご理解いただくという中で、私ど

もはまずは、大切なインフラをどういうふうに知っていただくか、こういうことも大変重要なことと考えている。皆さんのお話をお伺いして、この「教育目標」と私どものインフラとしての大切さ、こういうものを同じ共通のもとでしっかりPRしていくことが大切なのかなと思う。今年度も、夏休みにぜひ同じような形で小中学生、主に小学生中心になるが、PRをしていこうということで、引き続きやっていきたい。「教育目標」も続いて私どももPRさせていただきたい。

市長

私も市長になってあらためて、いろいろな場面で感じるのは、我々のPR不足もあるが、子どものころから含めてあらゆる場面で、平たく言うと情報提供が大切だということだ。大げさに言うと教育かなと思うが、下水道は、日常何の支障もなく使っていると、ありがたさとかどのくらいのコストがかかっているとか意識していない。

この間、女性団体連絡協議会と市長との意見交換会で、第1問が去年の7月19日に渡良瀬川の南の地域で一日、下水をできるだけ使わないでくださいと広報車を回したことだった。水処理センターという巨大な下水処理のプラントが鶴木町にある。川の南の全世帯の下水は渡良瀬川の下を通して管で巨大プラントにつなげている。渡良瀬川の下を通してはいるが、下を通すのにゲートがあって、逆流しないようにゲートがきちんと閉じるかというのを年に一度点検しているが、点検するので下におろしたら上がらなくなってしまった。南側の家の下水が全部止まってしまった。どんどんどんあふれてくるという状態で、できるだけ使わないでくださいというと同時に、近くのマンホールからバキュームカーで吸い上げて溢れないようにしつつ、うちの職員が決死の覚悟で入って行って、手作業で持ち上げてようやく上がって事なきを得た。

私も、どういう施設かということで、そのあとすぐ見せてもらったが、非常に巨大なプラントで成り立っている。下水を使わないでくださいということで、何が起きたんだということで初めて市民が知るということで、知ってもらいたい機会だなと思った。

何が言いたいかというと、子どもころから当たり前のように普段使っているものは気付かないけれど、市民生活が健康で文化的になるように、これだけの費用をかけてこれだけ巨大なものが、目に見えないけれどあるのだということは、我々の情報提供の問題でもあり、折に触れてそれを知ってもらうことは大事な市民教育だと思える。コスト意識もそういうものもないから、ありがたいうるかそこがわからなくて、知ってもらうことが大切だと思う。

都市建設部長

都市建設という道路を造ったりとか、公園、都市計画とかハードの部分が多い。先ほどお話があった、3. 11を機に災害の部分も書き加わり、自ら守る、共に助けるといふようなことだが、最近の話だと、雪の関係で私どもの職員が、路面の凍結防止ということで、朝5時とか夜遅くに融雪剤をまいて対応した。

最近、福井の国道8号が通行止めになって1,400台ほど動けない状態だと、そんなニュースがあった。周辺のラーメン屋さん、餃子の店が、トラックの運転手さんに温かいものを配って歩いている。もう一つ、立ち往生したトラックの中に山崎製パンの配送車が4台か5台あったということで、トラックの運転手さんが会社へ連絡を入れたら、すぐに配れとという指示で配って歩いたといふようなニュースも耳にした。教育ということになると、どうしても学力という視点に立とうかと思うが、心の教育もすごく大切だと思った。

自分の仕事が災害の防止と、未然防止も含めて災害対応といふような仕事もしているので、今回のそういうニュースを含めて、先ほどもあった、共に助け合うといふところの大切さを今回のニュースで強く感じた。その一部がこの中に書き加わったといふことは意義があることと感じている。

市長

道を造ったり橋を造ったりとか、まちづくりをしてもらっている部署だが、私が市長になってから思っていることがある。あるまちで街路樹を道に植えようといふことになって、役所が街路樹の種類を決めて、植える場所を決めて勝手に植えていったら沿線の住民から出てきたのは文句ばかりで、落ち葉が面倒くさい、なんでこんなところに植えたんだといふ文句ばかりだった。ところがあるところのまちは、街路樹を植えようといふときに市民に意見を聞いて、どこにどういふ街路樹を植えるかを市民に決めてもらって植えていったら、苦情が全然でないで落ち葉はその沿線の市民がみんな黙っていても掃除してくれた、こういう話があった。

さっきの「教育目標」と「学習目標」の話ではないが、いかに市民に参加意識を持ってもらうか、自分たちが決めたこととか自分たちでやったことは愛着が出る。ところが、行政が勝手にやると、なんでこんなところに勝手に植えたんだといふ話になる。それがいろいろな行政の場面で大切なポイントだなといふも思っている。市民力みたいな言葉でずっと言っているが、そういうことも含めて市民の参加意識といふか、そういうことを子どものころから、主権者教育みたいなことまで言うと言葉としては大げさだが、そういうことも絡んでくるなといふも思っている。

生活環境部長

私も「教育目標」の見直しに、一時期教育の部局にいたので関わったが、よくここまでまとめ上げたなと思う。生活環境部の切り口でいうと、市民生活の安全安心を守る一角を担っているということになるが、「教育目標」の社会連帯感、そういうところで今の仕事について言うと、小俣の最終処分場、あるいは南部クリーンセンターの建て替え、こうしたものを今関わっている。その地域の方々からすると、ある意味大変な施設を引き受けているわけで、市民としてそういうところでお世話になっているという思いが、どれだけあるかなと思う。

例えば、ごみはステーションに出してしまえばそれで終わりというわけではない。そういうことの中での市民相互のこの先どういう形で流れて行って、どういうふうに処理されるのだろう。こういう思いを一人ひとりの市民の方が持っていていただくと、そういう地域の方への思いでつながってくると思う。また、出せば終わりではなくて、一方の切り口として、ごみ減量、リサイクル等もお願いしている。そうしたものへの意識にもつながってくるのかなと思っている。

そういう点では、最後の表で見ると、総務部と並んで教育以外の部局でいうと、非常に生活環境部は関わっている事業が多いところであり、自治会等も私どものところで所掌しており、いろいろなお話の中で出てくる互助、そうした部分も生活環境部においては重要なキーワードになっている。今回の「教育目標」の見直しがうちの部の中で生きてくるかと思う。

もう一つ仕事の話でからめて言わせてもらおうと、市民の高齢化が進んで車の運転がなかなかできなくなってくる。あるいは車に乗れない高齢者の方もいらっしゃるということで、昔のようにバスの路線網が、民間事業者が撤退してしまったので、バスが走っているところはいいが、それ以外のところで、地域内の交通をどうするか、移動手段の確保をどうするかというところが、私どもの部としてのテーマになっている。そういう中で互助というキーワードを切り口に何とか新しい仕組みができないのか、これも模索している。

子どもから大人までの「教育目標」の考え方の中で何とかうまい方策が見つけられないか、お金を出して解決するということだけではない、お互いの力を少しずつ出し合って地域のシステムを自分たちで作っていく、そうしたことができないかということも今、模索している。そういう観点では、「教育目標」は大きな力になってくると思っている。

市長

ここも巨大なプラントを抱えていて、今、南部クリーンセンターの話が出たが、老朽化をされていて、だましまし使っている。下手をすると150億とか200億とかが、建て替えにかかるのではないかと。我がまちは、520億円と

いう財布のまちで、そのまちがそれをやらなければいけない。あと、この部でもう一つ言うと斎場もあって、これも30億とか40億とかかかるのではないか。市民会館があって、わからないが100とか120億とかかかるかもしれない。直近でやらなければいけない、中央消防署をやらなければいけない。四大施設と私は呼んでいるが、市民に今ずっと説明しているが、520億の財布のまちが、200足す100足す40足す40ぐらい、短い期間にやらなければいけないという、そういう時代を迎えている。これもなかなか市民に説明する機会がなく、発信不足だなと思っている。いろいろなところで説明することが、また、市民教育であり主権者教育でもあるのかなと思っている。

その辺、幹部たちと議論しているのは、「教育目標」とは離れるかもしれないが、生涯教育みたいなことだとすると、自分のまちがどうなっていくかに興味を持つことも大切な学習であり教育だと思う。よく部内的に議論しているのは、南部クリーンセンターの建て替えが200かかるとすればという文脈の中で出ているのは、ごみ袋である。今、45リットル10枚で150円、最初600円で始めたのが、いろいろな経緯があって150円になった。今150円でごみ袋代とトントンで、貯金が全くできていない。これだけの施設がいずれ老朽化してくるといのがわかっていながら、自戒を込めて言えば何もしてこなかった。普通は、どこの会社でも、企業経営者もいらっしゃるが、工場が老朽化していくから、そのためにこれだけ貯金しておいて、建て替えの時にはこれを使ってと考えるのだろうが、そういうことがされてこなかった。

去年、史跡の全国の首長の会議で、東広島というところに行って、スーパーマーケットによってみた。レジのところにごみ袋が置いてあって、45リットル10枚700円だった。そういうまちもある。多分みんなで話し合っ、いづれごみ処理センターが大変になるからみんなで貯金しようよと、多分そのまちは700円でやっている。これも奥が深くて、主権者教育ということと言うと、情報がない市民は、ただの方がいい、安ければいいわけで、そこもやっぱり広い意味でいえば教育であり、我々の情報提供の問題でもあると思う。

健康福祉部長

教育というと教育委員会が所管だと思われがちだが、本来教育というのはいつから始まるのかと考えると、妊娠して出産が始まって、教育というものが始まるのが8か月検診でブックスタート事業というのがあって、絵本がもらえる。お母さんがそれを家へ持って帰って読み聞かせを始める。その辺から実際子どもには教育が始まっているのではないかという気がする。

検診には4か月があって8か月、1歳6か月、3歳の検診があって、そのあと幼稚園なり保育所に入って、初めて家庭以外の外部の子どもさんたちとの集団生活が始まる。そこには幼稚園の先生がいたり保育士がいたりする。幼稚園

の先生、保育士たちの力が、人格形成に大きな影響を与えていて、その中で思いやりであるとか、やさしさであるとか敬老の精神だとか、学校に上がる前に学んでいることが多々ある。

それには、幼稚園の先生とか保育士たちが「教育目標」の中身もよく知ったうえで子どもたちと接することが大事だ。幼稚園、保育所を卒園、卒業して、うまく小学校へ引き継げる、この流れを作るためにも「教育目標」をよく学ぶということが、我々もしくは、幼稚園の先生方にも大事なことだと思う。

市長

幼児教育、幼いころからの教育というのは、健康福祉部も公立保育所が11か所、保育士さんが臨時も混ぜて200人くらい、そういう意味ではある意味大切な幼児期の教育ということになっている。

政策推進部長

私が市役所に入所したのは昭和55年で、入って建設部門に配属になったが、そのあとに「教育目標」というすごいものができたということで初めて聞いた。中身については直接関わっていなかったが、その後平成10年に改定して、これも部署が違うため直接関わっていないこともあり、中身については、よく理解していなかった。

今回、政策推進部ということで、改定作業の途中の経過、あるいは完成した段階ですべて見させていただいた。そんな中で、日本最古の足利学校がある郷土足利をもとに、先人が創った大変な「教育目標」、これについて非常に感慨深いと思った。

仕事との絡みで申し上げると、昨年度、一昨年のも暮れになるが、足利市のキャッチコピーとして、「素通り禁止足利」というものを打ち出した。その意味とすると、外向きには、足利にはいいところがあるので、素通りしないで、いっぱいいろいろなところを見てくださいということと、内向き、市民には、困った人がいたときには素通りしないで助け合いましょうというふうな意味がある。そういった意味で、目標の趣旨の中で思いやりとか絆とか助け合い、共助、こういうところと非常に関係があるなというふうに、作った時の議論を思い出していた。

そういった意味でも、今後、市民がふるさと足利をまずは誇りに思う気持ち、そういうところから大切にしていかななくてはならないのかなというふうに感じている。また、今回の改定においては、時代背景も含めて大きな改定をしていただいたと、こういう議論をすることが大切だと感じている。

総務部長

私ども、この最終ページの一覧表を見ていただくとお分かりのとおり、かなりの個所で関わりを持たせていただいている。人事課では、職員の育成ということで、スキルアップとかそういう形での研修を実施しているが、一番大きなのが、人権・男女共同参画の関係で、いわゆる人権問題、それから男女の共同参画という部分での関わりがかなり深い部分がある。

そういった中で一番大きく感じるのは、やはり幼少期にどれだけ教えることができるのかなということだ。やはり、人権問題等に関わるのは、小さい時に肌で感じた部分だと思う。大人になってからでは、悪い影響を受けていれば払拭できないという部分がある。そういった面では、幼少期の教育は非常に大事かなと感じている。それと、男女の差をどういうふうにとらえるかということも小さい時からの周りの環境とかそういうところから育まれる部分が多いのかなというように感じている。

一点、まったく違う視点で、先ほどお話のあった、「教育」という言葉について、私も庁議の時に「教育目標」の改訂版ということで見させていただいた時に、「教育目標」の主語はどこにあるのかなと思った。文章の中を読んでいくと自らが学習する部分であったり、子どもたちを教え導く部分であったり、そうすると、だれが教え育むのかなというのが、非常にあいまいな部分があるのかなと感じた。もしかしたら「教育目標」という言葉自体が違う言葉に置き換えた方が、計画全体の表現としてはいいのではないかと、先ほど聞いた中で思った。

○ 日程第2 議題(2)

市長

「かなふり松プロジェクト」を本年度から開始したということで、私も市民から期待する声も結構聴く。すぐ成果が出るものではなく、継続は力なりでやっていくべきものかなと考えている。その取り組み状況等々について、最初、教育長から今の状況、「かなふり松プロジェクト」に関するところをご説明とご発言いただきたい。

教育長

「かなふり松プロジェクト」、これの目指すものは、「足利市の教育目標」とずいぶん関わりのあるところだ。子どもたちにどんな力を育てるかという、まず学力とはということから、今の学習指導要領の狙っているところと足利学校のあるまち、足利の狙っているところが全く一致している。それが、子どもたちに自ら学ぶ、学び取る力、それを付けるのだというところを、まず

目標としてはっきりさせたかった。

その力をつけるためには、だれが何をやればいいのかということ考えた時に、「教育目標」の資料の三枚目のところを見ていただきたい。教育番号1というところがある。そこの(3)目標達成の場とのかかわり(教育機能連携)とある。「足利市の教育目標」は、目標を達成するために、目標達成の場を地域では、家庭では、学校では、行政ではと、四つの部署の果たす役割が書かれている。これを「かなふり松プロジェクト」は取り入れた。自ら学ぶ力を育てるためには、家庭では何をしたらいいのか、学校では何をしたらいいのか、それから地域の皆さんは何をしたらいいのか、行政はというところで具体的に挙げている。

学校では教師の授業力を向上しようと、家庭ではリーフレットの「学びのすすめ」をもとに家庭で指導してもらいたい、地域では、地域の協力ということでOBの方に放課後に子どもたちの勉強を見てもらう、指導をしてもらう。最後に行政はということで、学校教育課指導主事が先進地を視察して様々な情報を取り入れる。

その四つの柱で動き出しているのが「かなふり松プロジェクト」になる。成果は、今おっしゃったようにすぐには出ない。しかし、それが芽生えつつあるというのは、現場の様子を見ると着実に芽が伸びてきているという感じを受ける。

市長

この「かなふり松プロジェクト」に対する感想でも、あるいは、その一環として教育委員の皆さんに福井県を見てきていただいたので、その時の感想でも結構なので、これに絡むところでご意見とご感想をお聞かせ願えればと思う。

委員

「かなふり松プロジェクト」は今年度がスタートなので、今言われたようにすぐさまということではないかもしれない。でも、刷り込んで刷り込んでやっていると、足利の隅々まで行きわたった時にこの成果は素晴らしいものが必ず出ると私は思っている。この取り組みはこれからも絶対に続けてもらいたいと思う。

先ほど、「学びのすすめ」のリーフレットの話が出たが、これも、もっと知らせる方法を考えていただかなければいけないと思うし、我々教育委員会として、もっとこれを活用する必要があると思う。

常に気にしているのが、さっき申し上げてスマホだ。それがために生活のリズムが狂ったり、なされるべきことがされなかったりすることがある。時間は当然有限なので、それがスマホに向けられればその分だけ何かを手薄になった

りする。時間の概念というか、時間の有用性、あるいは有限な資源だということ、子どもたちは子どもたちなり、あるいは、それを見守る親は親なりに、しっかりと一日の生活の規則正しいリズムを作らせなければいけないし、作ってほしい。そういうのもこの中に入っているし、そういう意味ではぜひこれが活用されるといいと思う。

福井に行って一番私が驚いたのは、小学校でこちらの小学校ではスマホの所有率とかスマホで子どもが時間を費やしている問題はいかがですかと聞いたら、持っていないのでわかりませんということだった。小学校ではそういう意味では所持が進んでいなかったがためのことだと思うが、持っていないということが強い。それが当たり前になっていて、足利の小中学校で、いまさら持たせないというのはあり得ないので、持ってしまった以上仕様が無いとすれば、さっき言った時間感覚とか、日常生活の中で優先順位をつける必要がある。

私は、いつも10分考えてもらえればと話している。10分というのは1年間で3,600分になって、2日半になる。10分を浮かせると、結果的には1年に2日半分、何かができる。それは何に向けてもらっても結構だ。別に勉強に向けてくれとは言わない。新聞を読んでも結構だし、親子で話をしたっていい。ゆっくりお風呂に入ったっていいし、睡眠時間を延ばしてくれたっていい。そういう意味では時間感覚をもっと、子どもたちは子どもたちで、大人は大人なりの有用性を考えてもらった時に、今、非常に無駄に流されている時間というのがあとで悔いを残すということがあるのだろうと、私たちは伝えていきたいし、それをスマホに絡めて福井では思った。

市長

スマホのことは繰り返し出ているが、スマホに対して学校は、どんなふうに行っているのか。

事務局

基本的には学校の授業に必要なものは持ってこないということになっている。ただ、どうしてもスマホを持たざるを得ない家庭もあるので、そういった時には、基本は授業時間は学校で預かり、帰りに返すという形が多い。どうしても、いろいろな問題等が起こった時には、原因としてスマホでのメールのやり取りだとかLINEでのやり取りだとか、そういったところが友達関係がぎくしゃくする原因の一つとなることが多いかなというのが現状ではある。

委員

保護者の立場で考えてみると、今、PTA 連合会の会長が同じベクトルを向いていて、学力向上という話を集まりの中でされている。今まで、私がPTAに

関わってきた中で、一番、学力向上というところの話が出ていると思う。今まで、家読の動きとかをやっている中で、現状やっぱり保護者も将来のことを考えた時に、足利の子どもたちの学力が劣っているという認識がどこかにあったのだと思うが、明確に PTA 聯合会の会長が、学力の向上の話をしたというのは、私が関わった中では初めてだった。

そういう中では、教育委員会の方の学力向上の動き、「学びのすすめ」の方向と保護者の意識も合って来ている。これをしっかり組み合わせて問題意識を共有しながらそれぞれ親御さんに落とししていくというのが非常にいいタイミングになっているのかなと思う。こういう機会も、浸透して結果が出るまで時間がかかるので、それをしっかり長い時間をかけて学力向上を柱にして取り組んでいくと非常にいい成果が生まれるのではないかなと思う。学力向上を邪魔しているのがスマホであったりゲームであったり、あくまでも学力向上を柱にして、諸問題を認識していく、そんなようなことが大事ではないかなというふうに思う。

あとは、福井に視察に行かせていただいて非常に感じたのは、福井市は学習塾が少ない、あまりない、塾に通っている子は少ないというふうなことを言っていて、そこがすごく驚いた。足利で考えてみると、足利市内塾なんて至る所にあって、そういうところで学習の機会を親御さんがお金をかけて作っているのだと思うが、逆に福井市は学習塾がないからこそ、学校に対する期待とか、学校をどうにかしなければいけないという、そういう意識が非常に高いなというのを感じた。学校の先生だけではなくて、福井大学の教育課程で学んでいる学生が、休みの時には先生になって、地域の子を教えている、そこに対しての地域の子どもたちの参加率は非常に高い。要は行く場所がないからだと思う。

また、福井の学校に行ったら、福井市教育ウィークというポスターが貼ってあって、足利もやっている学校公開と同じことだが、それを中学校区ごとに一週間とかかけてやっていた。地域の方たちが、学校区の学校に自由に行ける、要は地域の方が学校に関わる機会というのが足利よりオープンではないかというふうなところも感じた。地域ぐるみの学校教育に対する関心の高さ、それがやっぱり結果としては学力の向上あるいは、成績がいい形で出ているのではないかなというのを視察に行き行って感じた。足利は、学習塾は多いけれど、さらに公の教育を盛り上げていく、そういう方法がもっと他にあるのではないかというのを感じた。

市長

関心の高さという話が今出たが、地域が子どもの教育に対する関心の高さという感じか。

委員

地域の方たちの関わりもあるし、ちょうど見たのは学校の下校時間に地域の方たちが何人か集まって来て、一緒にサポートするとか、それがすごく自然に行われているなという感じがした。そういう場面を見ると、学校のことに地域の人たちが関わるというのが普通に行われているのではないかという、そんな印象を受けた。

委員

先ほどから話題になっているスマホだが、足利のことだけに限らないで、男の子にとって大きな時間を費やすのは、ゲームで、女の子にとっては LINE だと思う。スマホを持っているか持っていないかという問題ではなくて、よく聞くと、持っていない低学年も母親のスマホを借りて LINE をやっている。皆さんも見かけると思うが、何かで待っている時間に親がスマホを貸して子どもにゲームをさせている。子供が泣いてしまうよりはいいかなと思って渡すのは分かるが、疑問に思っ、日本ではなくて他がどうやっているかなと調べてみたが、やはり外国人は自分のプライベートなものであるスマホ携帯を子どもには渡さない。携帯を渡してしまう、それをいじらせてしまう、多分、日本人にとっては、それはあまり違和感がないが、外国の方はそれをしない、プライベートなものだから、ということを感じている。

子どもはゲーム、LINE をやりたいに決まっている。親の方が親のスマホを貸さない、それも小学校ではなくて幼児期のころから、3歳児検診、1歳半検診の時から、その時に子どもに見せるようなことがあったならば、注意していく、それを喚起していくというところからではないのかなと思う。持っている、持っていないの問題では、私は、なくなっていくと思っている。

視察については、今回公立学校の他に私立のかつやま子どもの村小学校を視察先に加えていただいた。本当に自学自習で意識を大事にする、ものづくりを中心にした学校ということで、皆さんに見ていただけて良かったと思っている。その学校の特徴として、ミーティングというものがあるが、参加意識が一番大事な学校なので、例えば、さっきのクリーンセンターのことで思ったが、こういう時にその学校がすることは、子どもに問題を提示する。520億しかないのだけれど、みんな何か考えてくれるというと、子どもたちって結構合理的だったり、結構スマートな意見を言う。そういうときに例えば、「それはごみ袋を高くしてもしょうがないよね。貯金しなくちゃ。」「じゃあ、次はどうやったらごみを少なくするかも考えなくちゃね。」と、子どもたちって大人より考える時間がいっぱいあるので、結構無数にアイデアが出てくる。そんなことも教育の中に加えていっても、それこそ本当に参加意識、市民の教育なのかなと思った。福井県自身が協力をするということが当たり前なところも、公立学

校を見せていただいて、つながりが固いというのは雪国の特徴なのかなと思った。

委員

「かなふり松プロジェクト」、4点あったと思うが、その中の2点について話をしたい。一つは教師の授業力の向上ということで、現在、学力向上コーディネーターあるいは、指導主事の先生方が、各学校、全部の学校を年間5回程度訪問している。これは結構な回数だと思う。今までに比べると。これは各学校にとってはすごく大きな刺激になっていると思う。現に、私も学校訪問を今年8校させていただいてその様子を見たり聞いたりすると、実際に授業を先生方が互いに見せたり、見あったりして、最低1年に1回は自分の授業を開くと、公開するという形が進んでいると思う。中学校の場合でも、例えば中学校は教科制だが、学年でやっている。教科にこだわらずに学年全体で授業研究を行っているというのをずいぶん聞いた。それから、各学校でも、先進地の学校に校長先生をはじめとして、先生方がどんどん研究、見に行っている、見せてもらっているという状況もあった。

授業改善だが、市教委の指導計画の中にも出ているが、学び合いを深める取組みというのをかなり重視していると思う。実は、この学び合いというのは、言葉は柔らかいのですと通り過ぎてしまうが、これは、実は大きな意味があって、裏を見るとこの裏にはクラスの全員の子どもが学べる授業、全員に学ぶ権利を保障する、そういう先生方の熱い思いが入っている。誰も見放さない、誰も見捨てない、そういう授業をしたいと、わからなかったら、わからないと言って、誰かが、誰もが学びに参加できる、そういう授業を先生たちが目指しているのを感じる。昔、落ちこぼしとか落ちこぼれとかとかいう言葉が盛んに言われていたことがあったが、おいていかない、その全員を参加させるということ、今、先生たちは現場でチャレンジしている。これはすごいと思う。

今、足利の先生方は動き出しているというのをすごく感じている。これをずっと続けていけば、子どもたちの学力はぐっと上がってくるかなと思う。ペア学習とかグループ学習、先生対一人ではなくて、お互いにわからなかったら、ちょっと隣の子に聞いてみるとか、グループで聞いてみるとか、わからないままにしないという、それをかなり小学校も中学校も徹底してやっている。このことが基本的なところの大切な部分なのではないかなと思う。

12月にある中学校を見せていただいた。1年の数学の授業を見せていただいて、私が本当にうれしくて、校長先生にクリスマスプレゼントをいただきましたと言ったのだが、感動する授業だった。ずらっと見て、全員が学んでいた。しかも、すごく雰囲気がいい。落ち着いていて、やわらかで、居心地のいい学

級というか、そういうのができていた。こういうのがどの学校のどのクラスでもできれば最高だなと思う。それに向かって先生たち、校長先生をはじめとして、みんなで挑戦しているという姿、これもまた、先生たちも学んでいるというところが動き出しているのでありがたいなと思った。足利では、誰もおいていかない、見捨てない、これがキーワードかなと思った。

二つ目は、さっきおっしゃった、「学びのすすめ」だ。家庭教育懇談会の時、必ず、今年度は教育長さんがこれについてお話されていた。これをなんとか、これが足利の常識として日常化できたら、学校さまのあるまち足利というのは、そういうまちなんだよというふうになるのかなという気がする。PTA 連合会の方でも、同じ方向を向いてやってくださっている。PTA 連合会の教育懇談会の時にも、研修会の時にもこのお話があった。そういう形で進んでいるので、これがだんだんだんだん一保護者まで広まって、みんながわかっているとなるのが、いいなと、それを目指したいなと思っている。

さっき福井の話が出たが、福井は塾がない、学校が中心だ。フィンランドもそうだ。足利で、高校にトップで入ったある子は、塾に行っていなかった。家庭で学習をして、要するに学習が一本化しているというか、ロスがないというか、集中してそのことに取り組んでいるという、そんな気がした。

市長

さきほどの数学の授業の話は、いい話を聞かせてもらったなと思っている。「かなふり松」の話を聞きながら、以前にも言ったが、先生たちのチーム力というか、どこの仕事も一緒だと思うが、役所も一緒だが、それは自分の仕事ではないというふうに思わないで、いかに、現場の先生たちがチームでもってあたれるかというのが、大切ではないかなと思った。ぜひ、いろいろな機会を通じて、そういう先生同士のチーム力が上がるようなふうになっていくと、学力に結びついてくるだろう。実際、「かなふり松プロジェクト」をきっかけに、足利の先生たちが動き出しているというのが、今、表現があったので、大変心強く思っている。

ぜひ、いろいろな機会ですchool現場の先生たちのチーム力をあげてもらいたい。いろいろなところを見に行ってもらって、予算は厳しいが、そのための予算だったらつけるので、学校の先生が他へ出かけて行って、活力のある教育現場を見てきて、それで学んでほしい。そして、帰りに宿泊先で皆さんで食事をしながら語り合う、そういう機会をぜひ、教育委員の皆さんもそうだし、現場の先生たちも作っていただければと思う。以上で今日の会議を終わりにしたい。

○閉会